

第3期国定国語教科書にみられる書簡文教材の特徴

—『尋常小学国語読本』と『尋常小学読本』との比較を通して—

Characteristics of Teaching Materials for Epistle in the Third Japanese Language Textbooks Compiled by the State :

Through a Comparison Between the "Jinjou Shogaku Kokugo Tokuhon" and the "Jinjou Shogaku Tokuhon"

中嶋真弓 (Mayumi NAKASHIMA)

1. 問題の所在

文部省は、第3期国定国語教科書(使用期間は、1918(T7)から1932(S7)まで)として『尋常小学国語読本』と『尋常小学読本』の二種類の教科書を同時に発行している。二種類の国定国語教科書が同時に発行されたことについて、海後宗臣(1975)は、「全国各地の事情がちがっているにもかかわらず、ただ一種の国語教科書を全国のすべての小学校で使用することは不適当であるとの考えに基づいて、合理的に地域を考えた編集の方針によるもので、進んだ教材観を立てていたといえることができる」(p. 719)としている。『尋常小学国語読本』(以下、新読本)は、主として八波則吉、高野辰之によって編集され、『尋常小学読本』(以下、旧読本)は、芳賀矢一、三土忠造らがあたった。中村紀久二(2008b)は両読本について「全巻の分量・低学年での漢字配当の増加、教材の選択では児童の日常生活、田園趣味の養成、理科・実業・経済・公民および国勢・世界事情教材の増加などをあげていて、編纂趣意書をみるかぎり2種の国語読本の編纂方針に大きな差はみられない」(pp. 47-48)としている。

第一次世界大戦が終わり新しい時代の中で編集された両読本であるが、特に新読本は、「当時の児童中心主義の新教育思想を取り入れた国語教材を提供しようと努めた」(海後宗臣, p. 719)ことによって多くの小学校で使用された。中村紀久二(2008b)によれば、「1918(大正7)年度(使用初年度)における改訂本『尋常小学読本』採定府県は東京・愛知・長崎・栃木・広島・山口・熊本・岐阜の1府7県で、そのほかの府県では新編纂の『尋常小学国語読本』が使用」(p. 49)され、その後1929年度には全府県で改訂本『尋常小学読本』の使用が皆無となったとしている。

新時代の要望に応えるために発行されたのが新読本であるが、旧読本とはどのように違うのであろうか。大正期にも重視され作文の重要な教授内容でもある書簡文は読本にどのような役割を有し位置付けられていたのであろうか。

そこで、本稿では、両読本の書簡文に注目し読本にどのように位置付けられているかの比較を通して、書簡文にどのような役割が求められていたのかを明らかにすることを目的とする。

追究は、(1)両読本に採録された書簡文の1. 内容、2. 文体および頭語・結語の2観点からそれぞれの特徴を見出す、(2)(1)の結果をもとに比較し考察するの手順で行う。なお、本稿で述べる旧読本は、第3期の修正本を指す。また、『国定教科書趣意書』は中村紀久二(2008a)の復刻版を使用した。

2. 旧読本採録の書簡文の特徴

2.1 内容の特徴

〈表1〉旧読本の書簡文教材一覧						
巻	課目	課名	文体	内容項目	頭語(冒頭)	結語(末尾)
5	36	5-30-1 葉書	口書文	招待	あきつては長神様のおまつりにぜひおかけ下さいから、	おいでなさい。
		5-30-2 葉書	口書文	返答	お聞きをいたして、まことにありがたうございます。	妹と一しよに参ります。
7	30	7-6-1 友だちへの手紙	口書文	報知	君と別れてから、今日でちやうど一月になります。	どうぞそちらの様子も時々知らせて下さい。
		7-6-2 返事	口書文	返答	御手紙を下さつてありがたう。	君からよろしく書つて下さい。
		7-18-1 姉と姉の手紙 姉より	口書文	返答	お手紙ありがたう。	さやうなら。
		7-18-2 姉と姉の手紙 姉より	口書文	返答	昨日お手紙が届きました。	お着きの時間を知らせて下さい。
		7-27-1 口上代りの手紙	口書文	贈答	今朝始めて届つたさといもを、土のまゝ差上げます。	おいしかつたら、また差上げます。
7-27-2 返事	口書文	返答	見事な初物をたくさん下さいまして、有難う存じます。	あちのひものを少しばかり、おうつりに(*ママ)差上げます。		
8	30	8-7-1 写真を送る手紙	口書文	報知	此の間にいさんが帰つて来ましたので、うち中の者が揃つて、写真をとりました。	をば様、お笑ひになつてはいけませんよ。
		8-7-2 返事	口書文	返答	お写真を有難う。	皆さんに宜しく。
		8-15-1 礼状	口書文	礼状	今日学校から帰つて見ると、ふだんほしい／＼と思つてゐた箱入の色鉛筆が、机の上のつておきました。	今度此の鉛筆でうまく図画をかくて、お目にかけます。
		8-15-2 礼状	口書文	礼状	昨夜にいさんがお帰りになつた時、私はもう眠つておりました。	大事にしまつて置いて、お正月にさします。
		8-21 病氣見まい	口書文	見舞	杉本君、君は病氣気ださうですが、どんな御様子ですか。	今度の日曜には御見まいに行き参ります。
		8-30-1 旅行先より(富士山)	口書文	報知(旅書)	父に連れられて、京都のをちの所へ行きます。	それが日に照らされてある美しさは、何とも書へません。
		8-30-2 旅行先より(二金やしやほこ)	口書文	報知(旅書)	もう名古屋に來ました。	加藤清正がきづいたのださうです。
		8-30-3 旅行先より(明園遊園)	口書文	報知(旅書)	琵琶湖が見え始めたのは、彦根の辺からでした。	今夜京都に着く積りです。
		9-6 出産の知らせ	口書文 儀 文	報知	佐々木のねえさんは、お産のために、(佐々木の姉には、御慶のため。)	名がきまりましたら、また申し上げませう。(名がきまり候は、また申しあげべく候。)
		9-10-1 旅行先より(見舞)	口書文	報知(旅書)	其の後、うちでは皆さんお慶りのないことと思つておます。	近所を見物するつもりです。
9-10-2 旅行先より(見舞)	口書文	報知(旅書)	一昨日の午後六時を出帆して、昨日の夕方当真岡港に着きました。	まるで、草のやうだといひます。		
9-10-3 旅行先より(見舞)	口書文	報知(旅書)	真岡から十九里、山の中ばかり通つて、	四五日中には帰途につきますから、それはお目にかいつてお話しませう。		
9-20 旅行先の父に	口書文 儀 文	報知	十二日附の御手紙を今朝拝見致しました。(十二日附の御手紙今朝拝見仕り候。)	一日も早く御帰りになるやうにお待ち申して居ります。(一日も早く御帰りの御御待ち申し居り候。)		
9-30-1 水巻見舞の文	口書文	見舞	連日の大雨に候へば、大川に近き御地はいかゞと家じ居り候恐。	草々。		
9-30-2 同じ返事	口書文	返答	御見舞状を有難く拝見致しました。	御礼かた／＼取りあげず御知らせ申上げます。		
10	36	10-7 悔の文	口書文	返答	今朝思ひがけない電報を拝見して、びつくり致しました。	どうぞそちらの様子も時々知らせて下さい。お供へ下さいませ
		10-14-1 依頼の文 弟の一見へ	口書文	依頼	日増に寒さ相知り候恐、御障もあらせられず候や。	草々
		10-14-2 依頼の文 弟の二見へ	口書文	依頼	此の夏叔父様御いでの際、御買求め願ひ候御祖母様のおがね。	かしこ。
		10-24 兵衛内の生活	口書文	報知	拝啓	拝具。
		10-30-1 ブラジルから	口書文	報知(旅書)	此の間は手紙を有難う。	日本の冬が夏といふやうにあべこべなことです。
		10-30-2 ブラジルから	口書文	報知(旅書)	此の手紙と一しよに、絵葉書をたくさん小包で送りますからみんな御覧なさい。	ナイヤガラの瀧などは、とても比べものになりません。
		10-30-3 ブラジルから	口書文	報知(旅書)	二週間ばかり前から、雨の方のサンパウロ市に來ておます。	如何にも健康に思はれます。
		10-30-4 ブラジルから	口書文	報知(旅書)	森林地開墾の様子を見て歩いてゐたので、	ブラジルの視察も大体終つたから、間もなく帰国します。
11	33	11-10 旧節に呈す	口書文	報知	拝啓	敬具。
		11-28-1 夏休の通信 一山から海へ	口書文	報知	此の頃の暑さにお障りもございませんか。	皆さんに宜しく。
		11-28-2 夏休の通信 二海から山へ	口書文	報知	其の後どうしていらつしやるかと思つてあるところへ、お手紙をいたさきまして、うれしうございました。	どうぞお体を御大切に。
12	33	12-11 東郷の前より	口書文	報知	此の間はお便有難うございました。	きつとおもしろいおみやげの種がたくさん見つかることと思ひます。
		12-23-1 講話金の案内	口書文	案内	拝啓	草々
		12-23-2 返事	口書文	返答	御手紙拝見仕候	謹言

旧読本には、〈表1〉に提示した37通の書簡文が採録され、全体の14.8%(37/250)を占めている。なお、1つの課に複数採録されている場合は、1通を1課として数値化(以下同様)した。往信と返信の割合をみると64.9%(24/37)と35.1%(13/37)で、往復便での採録は40.0%(8/20)である。巻5と巻7の書簡文のすべてと巻8の最初の書簡文の課に往復便が位置付けていることから、書簡文の学習において、早い段階に日常生活での円滑な交流ができるように書簡文を書く力が求められていたと考えられる。これらの書簡文をみると、5-30-1(5-30-1は、巻5の30課の1通目を指す、以下同様)と5-30-2は姉妹、7-6-1と7-6-2は友だち同士、7-18-1と7-18-2は姉妹、8-7-1と8-7-2はおばと姪のやりとりといった友達といった親しい関係や親族など、児童にとって身近な存在での書簡文が採録されており、日常生活に近いものといえる。7-27-1と7-27-2は、初物を贈る設定のものであるが、日常生活の中で親の代筆などではこのような状況はあると考えられる。『尋常小学読本巻七・巻八修正趣意書』の第四章「教材二就キテ」に「従来ハ実用ヲ主トシ、従ツテ大人ノ文ニ類スルモノ多カリシガ、今回ハ実際家ノ意見ニ鑑ミ、初ハナル

ベク児童ヲ主人トシテ、其ノ生活ニ触レタルモノヲ採リ、次第二实用ノ教材ニ移ラントス」(p. 170)とある。書簡文の導入に児童と同年代の子どもが書いた書簡を位置付けることによって、児童自身が自分のこととして書簡文に書かれた事柄の状況を把握することができ親しみをもって、実生活に生かすことができるようにしているのである。

また『尋常小学読本巻七・巻八修正趣意書』の「教授上ノ注意 巻七」では、7-6-1「友だちへの手紙」について、「独立セル手紙文ノ最初ノモノナリ。(中略)今回ハナルベク児童ヲ本位トシ、其ノ生活内ニ材ヲトルコトニ心掛ケタリ。宜シク綴リ方ト連絡ヲ保チテ、教材ノ活用ヲ試ムベシ」(p. 185)としている。転校した友達への書簡という児童にとって実際にある状況での書簡ということも児童に現実味をもたせて学習することができるといえる。それゆえに、綴り方との連絡も図ることができるのである。第2期の趣意書では書き方との連絡が記されているが、第3期では綴り方との連絡も重視されたことになる。

書簡の差出人と受取人の関係をみると、小学生の子ども同士が 21.6%(8/37)、甥・姪とおじ・おばが 21.6%(8/37)、大人同士が 18.9%(7/37)、父親と子どもが 13.5%(5/37)、兄弟、姉妹がそれぞれ 10.8%(4/37)、恩師と教え子が 2.7%(1/37)である。家族、親族を合わせると 56.8%(21/37)である。採録された書簡文は、家族、親族、そして子ども同士といった学習者である児童の身近な話題や実生活に結び付く題材を有した書簡文が採録されているといえる。

差出人の性別では、男性作者 59.5%(22/37)、女性作者 40.5%(15/37)と男性作者が多く、男性を中心とした書簡文採録がなされているといえる。

内容項目	書簡数	割合
報知(旅信)	9	24.3%
報知	6	16.2%
依頼	2	5.4%
見舞	2	5.4%
礼状	2	5.4%
案内	1	2.7%
招待	1	2.7%
贈答	1	2.7%
返信:報知	6	16.2%
返信:礼状	3	8.1%
返信:承諾	2	5.4%
返信:弔慰	1	2.7%
返信:報知(旅信)	1	2.7%
書簡合計	37	100%

〈表2〉は、書簡文の内容から、内容項目を設定し整理したものである。最も多く採録されているのが報知(旅信)で、返信の1通を含めると10通 27.0%(10/37)である。報知(旅信)は、旅の様子を知らせる書簡である。それが多く採られているのである。10通中3通(30.0% 3/10)が日本国内からで、7通(70.0% 7/10)が樺太、ブラジルからのものである。報知(旅信)では、旅の様子や訪れた土地の紹介、そこでの思いや感想等、書簡文の形式にとらわれず、書き手の自由な思いを書くことができる書簡で、叙事文や叙情文に近いものといえる。それが多く採られているということは、外国の地理や気候、そこでの日本人の生活を理解させるための採録といえる。『尋常小学読本修正趣意書』の巻八の8-30「旅行先より」の説明には「第三十『旅行先より』ハ、手紙ノ一体トシテ旅信ヲ出シ、兼ネテ地理的知識ヲ授ケントス。」(p. 198)とある。同様に報知(旅信)の説明を趣意書でみると9-10「樺太だより」には、「新領土樺太ノ大体ヲ知ラシメントスルニアリ。」(p. 229)、10-30「ブラジルから」には、「世界的知識ヲ授クルト共ニ、我ガ移民ニ最モ関係深キ『ブラジル』ヲ紹介シテ、同胞発展ノ状ヲ知ラシメ、且進取ノ氣象を養ハントス。」(p. 251)、12-11「京城の伯母より」には、「我ガ新範圍タル朝鮮ノ大都京城ヲ紹介スルト共に、新同胞ノ生活状態ノ一斑ヲシラシ

先より」の説明には「第三十『旅行先より』ハ、手紙ノ一体トシテ旅信ヲ出シ、兼ネテ地理的知識ヲ授ケントス。」(p. 198)とある。同様に報知(旅信)の説明を趣意書でみると9-10「樺太だより」には、「新領土樺太ノ大体ヲ知ラシメントスルニアリ。」(p. 229)、10-30「ブラジルから」には、「世界的知識ヲ授クルト共ニ、我ガ移民ニ最モ関係深キ『ブラジル』ヲ紹介シテ、同胞発展ノ状ヲ知ラシメ、且進取ノ氣象を養ハントス。」(p. 251)、12-11「京城の伯母より」には、「我ガ新範圍タル朝鮮ノ大都京城ヲ紹介スルト共に、新同胞ノ生活状態ノ一斑ヲシラシ

メ、以テ我ガ国情ニ通ゼシメントスルヲ此ノ課ノ目的トス。」(p. 322)とある。つまり、読本に採られた報知(旅信)は、地理的教材として、その土地の様子や状況を理解させ、日本人としての生き方を学ばせる意図があったといえる。竹内文路(1923a)は「尋常小学読本巻十」の「ブラジルから」の解説で、「本課は父より子に送った四通の手紙となつてゐるが、実はブラジルの首府、面積、位置、気候、雄大な自然(アマゾン河及びイグアツスーの大瀧)南部に於ける日本人のコーヒー業、それから森林地開墾の状況を紹介するのである。」(p. 45)とした上で、「慈愛深き父が本国にある我が子に送った手紙としては、極めて冷かなもので温い愛情といふものゝ発露がない。手紙としては極めて詰らないものである。だからこの課を教授する場合には通読させて事実を領解せしめればよい。」(p. 45)としている。書簡文というよりは、内容理解のために書簡文の形式を借りたものといえる。これは書簡文の対者があるという特徴を生かし、児童に正に自分にその書簡が届けられたかのように受け取らせ、理解を深めるために書簡文の形式が活用されたと考えられる。これは、報知(旅信)の書簡が兄から弟、父から子どもというように、学習者の同年代のものへ宛てた書簡であることから自分も自分がかも受け取ったかのように思うことができるといえる。その一方で、作文との連絡の観点からみると、報知(旅信)は、前述したように叙事文や叙情文に近い形式であることから、これらが多く採られているということは、児童に自分の思いや捉えた様子や状況を自由に書くことができる力を求めているとみることができる。なお、旧読本では、樺太、ブラジルの7通と12-11の1通の計8通(21.6% 8/37)が外国からの書簡である。

2.2 文体および頭語・結語の特徴

文体においては、旧読本に採録された37通中、口語文体と候文体の割合をみると、前者が76.9%(30/39)、後者が23.1%(9/39)で、口語文体が多く採録されている。なお、9-6と9-20は、口語文体と候文体が対比できるように採録されているために、2文体として数値化した。候文体を採録している意図について巻九・巻十修正趣意書の中に「修正読本ニ於テハ、巻九ニ候文ノ始ルコトハ相同ジト雖モ、其ノ一体ニ偏セズ、猶口語文体ノ書翰文ヲモ交ヘタリ。(中略)候文ヲ読本中ニ置ケルハ、之ニヨリテ候文ヲ綴ラシムル模範タラシメントヨリハ、候文体ノ文ヲ読解セシメントスルニアリ。」(pp. 211-212)とある。候文体は読解が中心としているのである。竹内文路(1923b)は、「尋常小学読本巻十一」の11-10「旧師に呈す」の中で、「整つた型の候文である。想は簡単で深入りする必要もない(中略)全国共通の教科書として又候文の範例をと求めればかういふチピカルなものより外に仕方はあるまい。今後十年十五年の後に世に出る子どもは成人の後と雖も候文を書く必要はなからうと思はれるが、今のところ読む教材としては少しは無くてはならないものであるから、候文の一般を理解するための教材として取扱ひたい。」(p. 45)と述べている。読解が中心ではあるが、児童は候文を学ぶ必要があるのである。児童の候文への抵抗を少しでも軽減するために9-6と9-20では、口語文体と候文体が比較できるように採録されており、候文体に慣れさせる意図があるものと考えられる。両文体が採録されている理由について巻十一・巻十二修正趣意書では「書翰文ノ提出方法ハ、全般ノ上ヨリ見ルモ、著シキ変化ヲ生ゼリ。例ヘバ口語文ト候文トノ割合ノ全ク反対トナレルガ如キ、

新ニ口語文・候文対照ノ課ヲ置キ、又特ニ候文ニ行書体ヲ採用セルガゴトキ、其ノ改訂二三ニシテ止ラズ。」(p. 274)としている。雑誌『国語教育』においては、小学校では口語文体のみを学ばよといふ考えが大部分を占めている。金子彦二郎(1917)は「我が作文教授(六)」の中で、「新時代の国民に必要なならざる候文といふ形式を、併しながら無理だ無益だと知りつゝも可憐な幼童の頭に敲き込まずには置かない暴君があるんだから仕方がない。暴君とは誰？曰く為政者、曰く父兄、曰く中等教員即ちこれである。(中略)次代の国民たるべき青少年輩にも有用であり必須のものだと考へてゐるらしい。其結果彼等は『尋常科を卒業させたが手紙(候文)一本満足に書けない。』と不満を言ひ現代の教育を難ずる。(中略)入学試験の問題が明に之を語つてゐる。(中略)候文が書けなかつたら用事を述べ久濶を叙する手段が外に無いのならともかく、候文以上に作るにも読解にも輕易で、且つ達意といふ方面からいつても、同価値或はより以上の徹底を有つてゐる口語体で書くといふ手段があるではないか。」(p. 50)と主張している。また、保科孝一(1919)は「入学試験に改善を望む」の中で、「中学校や高等女学校の入学試験に文語や候文を課すことがあるから、尋常小学校がたとひ綴方教授以上の方針によるを利益と認めても、これに據ることが出来ないのである。(中略)中学校の入学試験は今後口語文を書き綴らせることにしたい、すくなくとも文体随意といふことにしたいと思ふ。」(p. 81)と述べている。社会の要求、そして入学試験等の理由から小学校でも候文体を教えざるをえない現状があることを意味している。

文末文体を〈表3〉、〈表4〉に整理した。

〈表3〉旧読本における男性作者の文末文体																						合計	割合							
	70801	70802	8-11-1	8021	80301	80302	80303	80304	80305	80306	80307	80308	80309	80310	80311	80312	80313	80314	80315	80316	80317	11010	110301	110302	110303	合計	割合			
ます	2	1	2	1	2	2			5	2	2	3															35	22.0%		
です				2	2	1	1	5	2	2	1																26	16.4%		
ました	1	2	2	2		1	1	1	2	2	2																25	15.7%		
候											2											4			1	1		8	5.0%	
御座候											2														2	1		8	5.0%	
ません	1	1				1																1	1	1	1			7	4.4%	
～でした								1	1		1																	5	3.1%	
居り候																										1		4	2.5%	
申候																										4		4	2.5%	
下さい	1			1																								3	1.9%	
～まで													1		1											1		3	1.9%	
存候																									1	2		3	1.9%	
～ですか	1			1																								2	1.3%	
べく候																										1	1		2	1.3%
申し居り候											1	1																2	1.3%	
候や															2													2	1.3%	
存じ候															1	1												2	1.3%	
申し候																2												2	1.3%	
でせう	1																											1	0.6%	
ですね			1																									1	0.6%	
～なさい																												1	0.6%	
～ませう										1																		1	0.6%	
下さいますな												1																1	0.6%	
木を俵りにかゝる																										1		1	0.6%	
燃える																										1		1	0.6%	
仕り候											1																	1	0.6%	
御座候や													1															1	0.6%	
存じ上げ候															1													1	0.6%	
相成り候																												1	0.6%	
教し候																1												1	0.6%	
たく候																									1			1	0.6%	
存じ奉り候																									1			1	0.6%	
申上候																									1			1	0.6%	
如何																										1		1	0.6%	
合計	7	5	4	7	5	4	3	12	6	8	13	3	14	5	15	5	4	10	9	11	5	4				159	100.0%			

	6-30-1	6-30-2	7-18-1	7-18-2	7-27-1	7-27-2	8の7の1	8の7の2	8-15-2	9の6	10の7	10-14-2	11-18-1	11-18-2	12の11	合計	割合
ます		1	4	1	3	3	2	3	2	1	3		13	9	16	61	51.7%
ました				1			2	2	4	1	3		2	1		16	13.6%
ません											1		1	1	3	6	5.1%
~ませう				1		1		1		1			1		1	6	5.1%
でせう			2	1							1		1			5	4.2%
です			2					1		1	1					5	4.2%
下さい				2											1	3	2.5%
~なさい	1		1												1	3	2.5%
ですね			1										1			2	1.7%
べく候										1		1				2	1.7%
ちやうだい				1												1	0.8%
いけませんよ							1									1	0.8%
~ましたね								1								1	0.8%
~ませ											1					1	0.8%
ございませんか													1			1	0.8%
お体を御大切に 候											1					1	0.8%
御座候												1				1	0.8%
願ひ上げ候												1				1	0.8%
合計	1	1	10	7	3	4	5	8	6	6	10	3	19	13	22	118	100.0%

〈表3〉の男性作者では口語文体では「ます、です、ました」、〈表4〉の女性作者では「ます、ました、ません、ませう、です」で、男女ともに「ます」が最も多く使われている。候文体では、男性作者の書簡が多く、文末文体は「候」の他に「御座候」が使われている。

頭語・結語を〈表5〉、〈表6〉、〈表7〉に整理した。

頭語	種類	書簡数	頭語別割合	種類別割合
		拝啓	漢語系	3
頭語なし		21	87.5%	87.5%
合計		24	100%	100%

〈表5〉の往信の頭語では、「頭語なし」が87.5%で、「漢語系」が12.5%である。「頭語なし」は、時候の挨拶や冒頭から本文に入るなどのものとしたが、往信では必ずしも頭語を書く必要がないことが分かる。

頭語	種類	書簡数	頭語別割合	種類別割合
		お葉書をいたゞいて、まことにありがとうございました。御手紙を下さつてありがとうございました。お手紙をありがたう。此の間は手紙を有難う。此の間はお便り有難うございました。	有難系	1
御手紙拝見仕候	1	7.7%		
十二日附の御手紙を今朝拝見致しました	1	7.7%		
御見舞状を有難く拝見致しました	1	7.7%		
今朝思ひがけなく電報を拝見して	1	7.7%		
昨日お手紙が届きました。お手紙をいたゞきまして、うれしうございました。	その他	1	7.7%	15.4%
1		7.7%		
頭語なし		2	15.4%	15.4%
合計		13	100%	100%

〈表6〉の返信の頭語では、「頭語なし」は15.4%で、「有難系」、「拝見系」が多く使われている。返信では、書簡に対するお礼やそれを拝見

〈表7〉旧読本における結語の種類				
結語	種類	割合		
		書簡数	結語別割合	種類別割合
皆さんに宜しく	ごきげん系	2	5.4%	8.1%
君からよろしく言つて下さい		1	2.7%	
さやうなら	さよなら系	1	2.7%	2.7%
草々	漢語系	3	8.1%	16.2%
謹言		1	2.7%	
敬具		1	2.7%	
拝具		1	2.7%	
かしこ	かしこ系	1	2.7%	2.7%
結語なし		26	70.3%	70.3%
合計		37	100%	100%

したなどある程度言い方が決まっていることから形式的な頭語が使われているといえる。

〈表7〉の結語では、「結語なし」が最も多く、続いて「漢語系」となっている。頭語と結語の「漢語系」の関係をみると、「拝啓-拝具」、「拝啓-敬具」、「拝啓-草々」

で、現在の定型ともいえる「拝啓-敬具」は1通みられるが定着しているとはいえない。また、「漢語系」が使われている書簡の書き手はすべて男性である。「かしこ系」も姪から叔母に宛てた1通みられるが、女性の書き手すべてに使われていないことから、小学校段階では結語も柔軟に対応できるように教授されているといえる。

3. 新読本採録書簡文の特徴

3.1 内容の特徴

新読本に採録されている書簡文は〈表8〉に提示した39通で全体の15.3%(39/255)である。新読本の趣意書には、それぞれの教材の分類が記されているために、〈表8〉にそれを記した。往信は82.1%(32/39)、返信は17.9%(7/39)で、往復便での採録は19.0%(4/21)である。往復便は、巻5と巻6の最初に位置付いている。往復便の差出人と受取人との関係をみると、5-21-1と5-21-2は姪と叔母、6-11と6-26-1は兄弟、8-12-1と8-12-2は主人と小僧、11-10-1と11-10-2は大人同士のやりとりである。巻4から巻6の往復便を含む書簡文は、差出人あるいは受取人が児童と同年代であることから、児童たちには理解し易いとは考えられるが、内容的には見舞文や入宮したこと、伊勢参宮のことといった書簡文の実務的なものや戦争に関わる内容のものから入っているという点においては、親しみやすいとは言い難いと考えられる。また、巻8の主人と小僧との書簡は、児童にとって身近な話題とはいえないものである。差出人と受取人との関係をみると、父母と子23.1%(9/39)、甥・姪とおじ・おば20.5%(8/39)、大人同士15.4%(6/39)、大人と国民12.8%(5/39)、兄弟10.3%(4/39)、同年代の友達同士7.7%(3/39)、主人と小僧5.1%(2/39)、恩師と教え子2.6%(1/39)、子どもと親族の子ども2.6%(1/39)である。家族と親族を合わせると56.4%(22/39)となる。

差出人の性別では、男性作者が84.6%(33/39)、女性作者が15.4%(6/39)と、男性中心の採録がなされている。

〈表9〉には、内容項目を整理した。報知(旅信)の割合が最も高く30.8%で、返信:報知(旅信)と合わせると、33.3%である。報知(旅信)の内訳をみると、13通中12通(92.3% 12/13)が外

〈表8〉新読本の書簡文教材一覧									
巻	課数	専科	学級	国語読本	文体	内容項目	頭語(冒頭)	結語(末尾)	『編纂書』による分類
4	24	4-13	系はがき	口語文体	慶賀	新年おめでとう。	これは其の系はがきです。	文学的教材	
5	27	5-21-1	水見舞	口語文体	見舞	おとんにうかひますと、お母様さまの舞に大気が出たさうです。	お見舞いを申し上げます。	文学的教材	
		5-21-2	返事	口語文体	返事: 挨拶	お手紙をありがとう。	どうぞよろしく申して下さい。	文学的教材	
6	27	6-11	入賞した兄から	口語文体	報知	国では初雪が降つたさうだね。	其の中に又くはしい事を知らせよう。	国民科的教材	
		6-11-1	伊勢参宮 入賞者の兄へ	口語文体	返事: 報知	其の後おさほりもございませんか。	かはつた事はありません。	文学的教材	
		6-26-2	父から	口語文体	報知(挨拶)	昨日正午にこちらへ着いて、午後外書へ参り。	夕方京都へ立つ。	文学的教材	
7	28	7-4	潮干狩	口語文体	贈答	昨日おあさんにするすましていただいて、	よつたのでございます。	文学的教材	
		7-12	大連だより	口語文体	報知	大連へ来てから、もうかれこれ七八十日、町のものも大分わかつて来ました。	後便に又いる／＼申し上げます。	地理的教材	
		7-26	注文	口語文体	注文	去る三日にお差出しの積物三十反、本日無事に着きました。	代金は二口合せて月末に送ります。	文学的教材	
8	33	8-12-1	小舟うら主人へ	口語文体	依頼	謹んで申し上げます。	おひまを願ひたうございます。	文学的教材	
		8-12-2	主人から小舟うらへ	口語文体	返事: 依頼	其の後どうかと案じてみました。手紙を見て安心しました。	何か好きな物を買つて上げて下さい。	文学的教材	
		8-18-1	サンフランシスコから	口語文体	報知(挨拶)	ハワイから出した絵葉書は見ましたらうね。	お前たちもせい／＼勉強なさい。	地理的教材	
		8-18-2	シカゴから	口語文体	報知(挨拶)	サンフランシスコから三日二機汽車に換乗して、今日此のシカゴに着きました。	此の絵葉書は此所へ来る途中、汽車の窓から見た秋の風景です。	地理的教材	
		8-18-3	ニューヨークから	口語文体	報知(挨拶)	長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、	おかあさんによろしく。	地理的教材	
		8-27-1	人を招く手紙	口語文体	招待	来る十六日は私の誕生日で、ちやうど日曜日ですから、	面白いことをして遊びませう。	文学的教材	
		8-27-2	人を招く手紙	口語文体	招待	来る二十五日に、亡母の三回忌の法事を致します。	お出でを願ひたうございます。	文学的教材	
		8-27-3	人を招く手紙	口語文体	招待	父が今年八十八になりましたので、来る二十五日に、	これはよりからのお願いでございます。	文学的教材	
9	27	9-2	トラック島便り	口語文体	返事: 報知	三月二十五日、お出しのお手紙を昨日受け取りました。	おとうさんやおかあさんによろしく。	地理的教材	
		9-12	弟から兄へ	口語文体	報知	にいさん、昨日でうちの田舎がすつかりました。	がみんでいさんのお便りを待つております。	実業的教材	
		9-23-1	手紙	漢文体	礼状	昨日は美しきお話の本を御送り下さい。誠に有難く存じ候。	両親の人々を驚かさんと楽しみ居り候。	文学的教材	
		9-23-2	手紙	漢文体	依頼	先日遊びにより候御郵券取直し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。	御知らせ下されたく、御願ひ申し上げます。	文学的教材	
		9-23-3	手紙	漢文体	依頼	拝啓。	草々。	文学的教材	
		9-24	水兵の母	漢文体	忠告	御付け、そなたは皇島舟の御職にも出ず、又八月十日の退陣御決断とやらにも、	御付けばかりの居にて此の手紙をしたためしか、よくよく御覧下されたく候。	修身の教材	
10	28	10-4	馬市見物	口語文体	報知	宮本の伯父様の所に着いたのは昨夜七時でした。	御座る御様子もつかぬから、目も眩せて其下りない。	実業的教材	
		10-13	京城の友から	口語文体	報知	しばらく御無沙汰致しました。	おついでに野田屋や山口屋にもよろしく。	地理的教材	
		10-20-1	手紙	漢文体	返事: 挨拶	御手紙有難く拝見致し候。	かしこ。	文学的教材	
11	32	10-20-2	手紙	漢文体	弔慰	乗り候へば、御祖母様には先日より御郵券の贈、御養生のかひもなく、	先は右よりあへず御儀申し上げます。	文学的教材	
		11-10-1	手紙	漢文体	見舞	拝啓。	敬具。	文学的教材	
		11-10-2	手紙	漢文体	拝復。	拝復。	拝具。	文学的教材	
		11-23-1	南米より父の書簡	漢文体	返事: 報知(旅信)	御手紙拝見致候。	季節の相反する事に候。	地理的教材	
		11-23-2	南米より父の書簡	漢文体	報知(挨拶)	此の手紙と一しよに、絵葉書をたくさん小包にて送り申候。	其の仕舞實に筆舌に尽くし難く候。	地理的教材	
12	31	11-23-3	南米より父の書簡	漢文体	報知(挨拶)	二週間ばかり前より南方のサンパウロ市に参り居り候。	如何にもけなげに存せられ候。	地理的教材	
		11-23-4	南米より父の書簡	漢文体	報知(挨拶)	森林地開墾の様子を御覧取候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。	程なく帰国致すべく候。	地理的教材	
		12-8-1	ロンドンから	口語文体	報知(挨拶)	ロンドンは何と言つても世界の大都合です。	むかひに先を参りやうなことはありません。	地理的教材	
		12-8-2	パリから	口語文体	報知(挨拶)	一昨日朝ロンドンを出発して午後早くパリに着きました。	是れもの大きなパリ一帯も御ど一日に見えませう。	地理的教材	
		12-8-3	ベルゲンから	口語文体	報知(挨拶)	あゝ、此のむざんな光景を御らんなさう。	山脈の聲をききベルゲンの雄辯に立つておます。	地理的教材	
12-8-4	ベルリンから	口語文体	報知(挨拶)	汽車でドイツの國內にひつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、	自國の豊穡を御覧するため童に活動してゐるのには全く感服しました。	地理的教材			
12-8-5	ジュネーブから	口語文体	報知(挨拶)	世界の公園といはれてゐるスイスは、至る所我が日本のやうに景色がよい。	如何にも心地よく眺められます。	地理的教材			
12-24	旧師に呈す	漢文体	報知	拝啓。	敬具。	文学的教材			

〈表9〉新読本の内容項目一覧		
内容項目	書簡数	割合
報知(旅信)	12	30.8%
報知	6	15.4%
依頼	3	7.7%
招待	3	7.7%
見舞	2	5.1%
慶賀	1	2.6%
贈答	1	2.6%
忠告	1	2.6%
注文	1	2.6%
弔慰	1	2.6%
礼状	1	2.6%
返信: 報知	2	5.1%
返信: 報知(旅信)	1	2.6%
返信: 安否	1	2.6%
返信: 承諾	1	2.6%
返信: 礼状	1	2.6%
返信: 祝賀	1	2.6%
書簡合計	39	100%

国からのもので、国内のものとは6-26-2の父が伊勢参宮の様子を息子に宛てて出したものである。前述したように報知(旅信)は、書き手の自由な思いで書くことができる書簡であり、それが多く採録されていることは児童にとって作文に生かすことができる書簡といえる。また、その多くが、外国からのものということから、児童には興味ある内容で、読む楽しさにもつながると考えられる。採録の意図は、これら植民地の土地の様子やそこで生活する日本人のたくましさや勤勉さ

を読み取らせることにあるが、これらの内容を説明文ではなく書簡文の形式を借りて書かれて

〈表10〉新読本における男性作者の文末文体																									合計	割合									
	4010	5011	704	7012	7020	8022	8012	904	9010	1004	10010	1104	11010	1204	12010	1304	13010	1404	14010	1504	15010	1604	16010	1704	17010										
ます				5	2	2		2	5	1	2	10	3													60	21.6%								
です	1	1		5				4	2	1		11														45	16.2%								
ました	1	1	1	2	1	1		2	1	4		3	5													37	13.3%								
候																										1	23	8.3%							
ません							1	1	1			1														9	3.2%								
申候																										3	8	2.9%							
ございます			1		2						1	2															6	2.2%							
下さい						1	1					1	1														5	1.8%							
層候																												5	1.8%						
でした												1																4	1.4%						
～した	1	1	2																								4	1.4%							
～し(語尾) (+～語尾)	1						1	1																			4	1.4%							
ませう				1				1				1																3	1.1%						
ある(～がある)			2																									3	1.1%						
御座候																											2	3	1.1%						
～だ	2																											2	0.7%						
～だらう	2																											2	0.7%						
～(語尾) (+～語尾)																												2	0.7%						
層り候												1	1															2	0.7%						
申し上げ候																												2	0.7%						
仕候																												2	0.7%						
たく候																												2	0.7%						
べく候																												2	0.7%						
～さうだね	1																											1	0.4%						
なれた	1																											1	0.4%						
ゆるされた	1																											1	0.4%						
～なのだ	1																											1	0.4%						
～する	1																											1	0.4%						
知れない	1																											1	0.4%						
出てる	1																											1	0.4%						
知らせよう	1																											1	0.4%						
～はない	1																											1	0.4%						
ございせんか		1																										1	0.4%						
でせう					1																							1	0.4%						
ありません		1																										1	0.4%						
参つた			1																									1	0.4%						
～(語尾) (+～語尾)			1																									1	0.4%						
買った			1																									1	0.4%						
帰る			1																									1	0.4%						
立つ			1																									1	0.4%						
行く													1															1	0.4%						
待っております													1															1	0.4%						
語る(口語に著)																												1	0.4%						
上げる(口語に著)																												1	0.4%						
おめでとう	1																											1	0.4%						
見ましたらうね																												1	0.4%						
ごらん																												1	0.4%						
～(語尾) (+～語尾)																												1	0.4%						
～(語尾) (+～語尾)																												1	0.4%						
承り候																												1	0.4%						
参り候																												1	0.4%						
相成り申候																												1	0.4%						
申上候																												1	0.4%						
願い上げ候																												1	0.4%						
願上候																												1	0.4%						
存じ層り候																												1	0.4%						
存じ参り候																												1	0.4%						
申し出で候																												1	0.4%						
致層り候																												1	0.4%						
驚き入り候																												1	0.4%						
驚入候																												1	0.4%						
致候																												1	0.4%						
候ぞ																												1	0.4%						
候とか																												1	0.4%						
度候																												1	0.4%						
～(語尾) (+～語尾)																												1	0.4%						
合計	3	15	5	9	2	14	4	5	3	12	3	12	2	4	28	11	1	3	29	25	7	8	7	5	5	9	9	7	9	3	3	4	12	278	100.0%

いるところに児童に親しみやすく、このように書くとより分かるといった作文にもつながる教材といえる。8-18の課名は「アメリカだより」であるが、新読本に外国の教材を採録している意図として「巻七・巻八編纂趣意書」には、「(巻七には 引用者補)学年ノ進ムニ從ヒ児童ヲシテ徐々ニ外国ノ事情ヲモ知ラシメントスルノ趣意」(p. 54)とあり、続いて巻八には「亜米利加等ノ教材ヲモ増加シ、且叙述ノ方法モ従来ノ如ク成ルベク力強キ印象ヲ与ヘンコトニカメタリ」(pp. 55-56)とある。

内容を理解させるために、叙述の工夫もなしているというのであり、作文につながるものといえる。しかし、新読本の11-23「南米より(父の通信)」は、前述した旧読本の10-30「ブラ

ジルから」と同様の内容であるが4通とも候文体で書かれている。「南米より」について玉井幸助(1923)は、「尋常小学国語読本卷十一」の中で、「本課は南米視察旅行中の父が、家にある二人の子供へ送った手紙四つを集めたもの、形式上の要旨としては候文の読解力を授ける点にある。候文は小学児童に綴る練習をさせる必要はないから、本課を綴方の手本にさせる必要はない。目で見ても得し、耳で聞いて了解する事を主要な仕事とする。内容上の要旨はブラジルの様子を知らしめ、世界を家とする雄飛の心を養ふにある」(p.44)と述べている。候文を読解しながら、南米の様子やそこでの日本人の在り方を学ぶためのもので、児童に親しみやすい書簡文の形式を借りて候文体の読解をする中で内容理解をさせるために位置付けられたものといえる。

3.2 文体および頭語・結語の特徴

採録された書簡文の文体は、口語文体が66.7%(26/39)、候文体が33.3%(13/39)である。

文末文体を〈表10〉に男性作者、〈表11〉に女性作者と分けて整理した。男性作者の口語文体では、「ます、です、ました」が多く使われ、女性作者では「ました」が使われている。

頭語・結語を〈表12〉、〈表13〉、〈表14〉に整理した。〈表12〉の往信の頭語では、「頭語なし」が大部分を占めている。また〈表13〉の返信の頭語では、「拝見系」、「有難系」、「漢語系」、「その他」が使われている。

〈表14〉の結語では、「結語なし」が大部分を占めている。「かしこ系」は1通みられるのみである。「漢語系」の対応関係では、「拝啓-草々」「拝啓-敬具」、「拝復-拝具」で「拝啓-敬具」は2通にみられるが、旧読本同様現在のように定型として定着しているとはいえない。

	502101	502102	502701	502302	9の24	100001	合計	割合
ました		9					9	22.5%
候					4	1	5	12.5%
存じ候				1		2	3	7.5%
ます		1	1				2	5.0%
です	1		1				2	5.0%
でした		2					2	5.0%
下さい		2					2	5.0%
申し候						2	2	5.0%
たく候					1	1	2	5.0%
申し上げます	1						1	2.5%
ませう			1				1	2.5%
いらつしやい			1				1	2.5%
居り候					1	1	2	5.0%
致し候					1	1	2	5.0%
申し上げ候				1			1	2.5%
願ひ上げ候					1	1	2	5.0%
候ぞ					1	1	2	5.0%
候はずや					1	1	2	5.0%
こと(候文に有)					1	1	2	5.0%
申さず(候文に有)					1	1	2	5.0%
合計	2	14	4	2	9	9	40	100.0%

頭語	種類	割合		
		書簡数	頭語別割合	種類別割合
拝啓	漢語系	3	9.4%	9.4%
謹んで申し上げます	その他	1	3.1%	3.1%
頭語なし		28	87.5%	87.5%
合計		32	100%	100%

頭語	種類	割合		
		書簡数	頭語別割合	種類別割合
お手紙をありがたう	有難系	1	14.3%	14.3%
御手紙有難く拝見致し候。	拝見系	1	14.3%	28.6%
御手紙拝見致候。		1	14.3%	
拝復	漢語系	1	14.3%	14.3%
手紙を見て安心しました。	その他	1	14.3%	28.6%
~昨日受け取りました。		1	14.3%	
頭語なし		1	14.3%	14.3%
合計		7	100%	100%

〈表14〉新読本における結語の種類				
結語	種類			
		書簡数	結語別割合	種類別割合
かしこ	かしこ系	1	2.8%	2.8%
敬具	漢語系	2	5.1%	10.3%
草々		1	2.8%	
拝具		1	2.8%	
おかあさんよろしく。		1	2.8%	
おとうさんやおかあさんによろしく。	ごきげん系	1	2.8%	7.7%
おついでに御挨拶やお言葉にもよろしく。		1	2.8%	
結語なし		31	79.5%	79.5%
合計		39	100%	100%

4. 考察

4.1 両読本の内容の特徴から

書簡文の採録状況を見ると、旧読本が 14.8%、新読本が 15.3%で、後者がわずかに多く採録されている。往復便でみると、旧読本が 40.0%、新読本が 19.0%と旧読本が書簡文本来の往来物としてのやりとり、つまり人との交流を重視していることが分かる。往復便の重視は、日常生活に目を向けていることにつながり、より実用を求め

ていたといえる。

大正期の学習は児童主体、随意選題等の議論がなされた時期であるが、その観点から書簡文をみると、両読本とも初めて登場する書簡文は、同年代の子どもが書いた文章であり、同年代の子どもが受け取った書簡文であることから、身近な書簡文から入っていると見える。しかし、旧読本が祭りへの招待とその返事、転校した友達への手紙とその返事といったより身近な話題であるのに対して、新読本では水害の見舞いとその返事、入営した兄からの書簡といった児童の興味がかき立てられる題材からの導入にはなっていないといえる。書簡文の導入部分からみると、旧読本は身近な話題から子どもなりの実用の書簡から入り、新読本は一般的な実用から入っていると見える。また、新読本では入営の話題など、導入から書簡文を通して内容理解をさせる構えが看取できる。秋田喜三郎(1921)は、「国語読本巻七の韻文と書翰文」の中で、「尋常小学国語読本巻七を通読して失望したのは、韻文と書翰文の旧套を脱せないことであつた。(中略)児童の生活に即した書翰文の忘れられたのは何う見ても国語読本巻七のために惜しまざるを得ぬ」(p. 34)とし、「一種読本(本稿の旧読本のこと 引用者補)の書翰文は何れも児童の生活の上に立つてゐるが、三種読本(本稿の新読本のこと 引用者補)のは大人の生活の上に立つて、功利的な実用的なもの、或は他に目的を有つた方便的なものである」(pp. 34-35)と批判している。そして、一種読本について「『友だちへの手紙』『姉と妹の手紙』『口上代りの手紙』の三篇があつて、何れも趣味的なものであるから児童は定めし歓迎することであらう」(p. 37)と述べている。

内容項目では両読本とも、多くの項目の書簡を学ばせるように網羅されていることが分かる。そして、両読本に最も多く採録されているのが外国からの書簡の中でも報知(旅信)である。旧読本が 27.0%、新読本が 33.3%である。しかし、新読本の 12 通の内 4 通は候文体で書かれたものであることからそれを省くと 23.1%となる。わずかに旧読本の数値が高いが、両読本とも報知(旅信)の叙述を読み理解することを通して、作文においてもどのように様子や状況、自分の感じたことを書けばよいかを学ぶことにつながると見える。そのような意味において、両読本とも、児童が主体的な読み手、そして書き手となるような採録がなされているといえる。読本に位置付けられた書簡文の役割としては、両読本において、例えば外国からの書簡では、その土地の気候や地形、文化や産業、さらには日本人とその土地との関わりを理解させるための読解教材として位置付けられている。本来であれば、説明文や記事文での提示でもよいのである

うが、あえて書簡文の形式を借りての採録となっているのである。前述したように書簡文の対者があることによって、児童自身が自分のこととして捉えることができることも利点の一つといえる。また、書簡文が口語という意味で語り掛けてくるような臨場感をもって読むことができるというよさもあると考えられる。書簡文本来の伝達という役割とともに児童が理解し易い一つの手立てとして書簡文が活用されているともいえる。

差出人と受取人との関係では、家族、親族との交流書簡が旧読本では56.8%、新読本では56.4%とほぼ同数であった。同年代の子ども同士の書簡では旧読本が21.6%、新読本では7.7%で、旧読本の方がより児童に寄り添った題材を採録しているといえる。

差出人では、旧読本が男性作者59.5%、女性作者40.5%であるのに対して、新読本は男性作者84.6%、女性作者15.4%と男性作者の方が多く採録されている。男女が同一のものを学ぶ小学校において、旧読本においては、女子もより興味をもって読むことができるのではないかといえる。

前述した趣意書にもあるように、両読本とも行書で書かれた書簡が採録されている。秋田喜三郎(1924)は「尋常小学国語読本巻十二」の12-24「旧師に呈す」の中で、「本文の文字は行書を用ひてゐる。この取扱としては唯読ませるだけに止めず、硬筆でよいから書き方の練習をさせる必要があらう」(p.46)と述べている。読本の書簡文には、内容理解の上に、書簡文を書くという作文との連絡、行書で書簡文を書くという書き方との連絡といった多様な学びを含んだ教材ともいえるのである。

4.2 両読本の文体および頭語・結語の特徴から

文体においては、旧読本が口語文体76.9%、候文体23.1%、新読本は口語文体が66.7%、候文体が33.3%で、新読本の方が口語文体の採録数値が低い。旧読本の修正を行った芳賀矢一は口語文体を主張しており、その考えを反映しているともいえる。

往信の頭語では、両読本とも「頭語なし」が大部分を占めている。返信の頭語では、新読本に「漢語系」が1通みられる。また、旧読本が「有難系」、「拝見系」が多いといえる。結語については、新読本には「さよなら系」が使われていないことが分かる。

頭語、結語ともに「頭語なし」、「結語なし」が多いことから、小学校では形式的な言い方ではなく、児童の表現方法で書かせるようにしているといえる。

4.3 まとめ

本稿では、第3期国定国語教科書において小学校の書簡文がどのような位置付けにあり、どのような役割を有していたかを旧読本と新読本の比較を通して明らかにした。

その結果、両読本とも今まで以上に児童の生活に寄り添った題材や児童の興味のある内容を提示しようとする構えはみられ、同一の方向性を看取することができた。しかし、その詳細を分析するとより旧読本が児童の実態に見合った実用を重視しようとしていることも分かった。また、両読本ともに、書簡文が読本において作文との連絡、書き方との連絡といった側面からの学習材として位置付けられているとともに、書簡文の形式を借りて児童に理解させるための手立てとして活用されたことも分かった。

今後、これらの書簡文の役割がどのようになっていくかをさらに議論する必要があると考えている。

引用・参考文献

- 秋田喜三郎(1921)「国語読本巻七の韻文と書翰文」国語研究会『国語教育』第6巻第5号, 育英書院.
- 秋田喜三郎(1924)「尋常小学国語読本巻十二」国語研究会『国語教育』第9巻第3号, 育英書院.
- 海後宗臣(1975)『日本教科書大系近代編第七巻 国語(四)』講談社.
- 佐野裕子(2017)「第三期国定読本における書簡文」京都橋大学研究紀要編集委員会『京都橋大学研究紀要』44, pp. 152-168.
- 竹内文路(1923a)「尋常小学読本巻十」国語研究会『国語教育』第8巻第3号, 育英書院.
- 竹内文路(1923b)「尋常小学読本巻十一」国語研究会『国語教育』第8巻第5号, 育英書院.
- 玉井幸助(1923)「尋常小学国語読本巻十一」国語研究会『国語教育』第8巻第8号, 育英書院.
- 中嶋真弓(2018)「明治末期から大正初期の書簡文指導の在り方」愛知淑徳大学文学部論集編集委員会『愛知淑徳大学論集-文学部篇-』第43号, pp. 99-111.
- 中村紀久二(2008a)『復刻版 国定教科書編纂趣意書第三巻』国書刊行会.
- 中村紀久二(2008b)『復刻版 国定教科書編纂趣意書解説・文献目録』国書刊行会.
- 滑川道夫(1977)『日本作文綴方教育史1 明治編』国土社.
- 野地潤家(1998)『中等国語教育の展開-明治期・大正期・昭和期-』溪水社.
- 芳賀矢一選集編集委員会編(1987)『芳賀矢一選集第4集上』国学院大学.
- 茗荷円(2017)『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう.

(本研究は、愛知淑徳大学研究助成令和4年度特定課題研究「明治後期から大正期の書簡文教材史研究」の成果の一部である。)